

# 光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家  
編集／光の子 編集委員会  
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277  
TEL／0480-72-3883  
振替／東京3-128022  
印刷／(株)ドモン企画



絵・中島 英子

は  
る

## 罪に死に神に生きる

(ローマの信徒への手紙 第六章 一～十四節)

理事長 福島 勲

子どものころ絵解きなどで仏教の地獄、極楽を聞かされた。死後の地獄の恐ろしさから極楽への救いの道を勧められた。聖書では創めに楽園があった。人は罪の故にここから追放される。地獄がはじまった。死の彼方にある未来の地獄ではなく、罪に満ちた地獄的存在である。ユダヤ人もギリシヤ人も全人類が罪の苦悩の中にある。

この人間に神は神に帰ることを呼びかけられる。

楽園への回帰、これがキリスト教の根本的な問題である。

プラトンの表現を借りると人間とは、賢者とライオンと百頭をもつヒドラを一つの袋に縫い込めたようなものである。

賢者は常に上位につくことを望み、支配と権力の座に座りたがるが、ここでは孤独を味わうとアランは言う。ライオンは百獣の王として獰猛であり破壊者である。ヒドラはギリシヤ神話にある邪淫の象徴である。

こうした人間の極悪の現状に対して、ユング(スイスの心理学者、牧師の子)は、神の三位一体に悪魔を加えて四位一体といった。この表現の是非はさておき、われわれ流に解して、抜き差しならぬ罪の力、善悪二元論とも思われる強力な罪から、人はどうやって脱出し神に回帰できるであろうか。

たとえ自己の悪を悟って自己改造を企てたとしても、所詮人は人、完全に罪の自己に死に、新しい自己に甦ることは不可能である。

ローマ人への手紙第六章のここは洗礼の秘義を示すものであるが実に神秘的である。

キリストと共に死に、キリストに生きる奥義の儀式である。われわれはただ信じることで以外にはない。キリストの甦りが豫め証として、信ずるわれわれもこれに似せ合わせられる神の約束である。

少し日が経たことだが、今年

の年賀状は全部手書きで、宛先によって文章を変えた。ある人たちは漢詩で王維の歎白髪を書き送った。七言絶句のこの詩の後半二句に

一生幾許傷心事

不向空門何處鎖

とある。空門（仏教）の横に、もちろんわたしにはここぞイエス（耶穌）であると蛇足ながら書き添えた。

老いの白髪を嘆くことだが、老いてますます心傷めること、過去の罪悪、老い先の不安、キリストによらないで、どこにこの憂いを消す安らぎを求めることが出来ようか。

あのキリストの十字架上の悲痛な叫びや、耐えがたい苦しみこそ、われわれの罪のための代苦である。

イエスのこの状をみて、神の子などと言ったが、ただの人間だったと嘲るものもある。しかし、死をみることに帰するが如しといった十字架でなかったことが、逆にイエスは主なりとの信仰を強めてくれる。われらの救いのための神の絶大の苦しみであるからである。

## 挑戦

施設長 今関 公雄

今春も二名の若者が県立高校の入学試験を受けた。安全第一ではなく、失敗を覚悟して第一志望に挑戦した。このことは彼らが、小四・五で入所し、ほぼ小一・二からやり直しての学習だったことも考え合わせると意義も一段と深まるのである。

確かに、失敗を回避して安全第一で行く道もある。また、実力不相応な選択で多少とも無責任さがともなう。しかし、自分の全力を傾注して過大に挑戦することは更に尊いと思う。

養護施設での養育目標は、目に見えるものとしては、社会的自立能力の涵養と言える。しかし、いわば究極的な目標は、生涯何かに挑戦し続ける人格形成にあると思う。換言すれば、生涯に亘って自己実現を志向するパーソナリティの形成であり、且つ、可能性を求めて最後の最後まで努力する能動性とも言える。

光の子どもの家の最年長二名

は、四月から高校二年となる。

したがって、当面の目標は、二年後の社会的自立である。一般的に考えても十八才では人格的成熟の途上にあるところである。しかも、施設入所に至るまでの劣悪な生活歴も相まって社会的自立にふさわしい人格的成熟には程遠いと思われる。

しかし、時は確実に到来する。すると、一方では、未成熟であると言う不利な条件を抱えつつ、他方では、厳しい現実社会に突入するという矛盾を背負うことになる。このため、近い将来の社会生活に於いて、一再ならず失敗も覚悟しなければならぬであろう。

子のような挫折を乗り越えさせるものは何か。確かに、彼らの周辺の指導・助言などの支援が必要不可欠である。しかし何にもまして、彼ら自身の挑戦的な生命力がその根幹をなすと言えよう。挫折や苦境の只中であつて、なおも可能性を求めて前

進しようとする自己実現力こそが、道を拓くと思う。

福祉施設の現実もまた、ここでの挑戦的な営みと言えよう。一方では、条件が不備である現実を抱えつつ、他方では必要な課題を追求するのである。

先の最年長の二名の男子の社会的自立への生活環境整備や人格的成熟への取り組みが、私たちの挑戦的な課題である。前者については、現状の施設生活様式では社会的自立への自活訓練が困難であり、新たな施設整備が求められるところである。これは新たな予算を伴い負担を覚悟しなければならない新規事業ともなる。

しかも、これらへの私たちの挑戦こそが、彼らの人格的成熟や挑戦的生命力へのモデルともなると考えられる。実に、子どもたちは「親の後ろ姿を見て育つ」のである。施設整備への取り組みは、それが困難な条件下であればあるほど、子どもたちへの手本となるであろう。

私たちは、新たな挑戦へ歩を進める時を迎えつつある。

エッセイ

## 日本刀一振―『夜明けのプロムナード』後日談

中島 睦雄（県立高校教諭）

『夜明けのプロムナード』というタイトルでエッセイ集を出版した。これは俳誌『浮野』の創刊十五周年記念事業の一つとして行われた関係で、献本への礼状やその他の書状がたくさん舞い込むということになった。

いままです活字でしか接したことのない高名な俳人や作家の方々のものも含まれていて、これらは私の家にとつての宝になるはずである。しかも多忙な中、無名の人物が書いた四百頁を越す本を読んで下さった感想が添えられていたりして、恐縮したり大喜びしたりの日が何度もあった。特に先日読売文学賞を受賞された作家真鍋典夫氏が牧羊社の「俳句とエッセイ」誌に『夜明けの・』の書評をお寄せ下さったのは大感激であった。

本の表紙に自作のシクラメンの花が描かれていて、親しい人からはシクラメンの鉢なども届き、家の中がすっかり明るくなった。そんな中で、私が予想もしな

かった品物が届けられた。

暮のある日曜日、兄夫婦が来て「ほら、一茶の俳画と刀を持ってきたぞ」と包を出した。

もう三十年位も前になろうか、兄夫婦に男の子が生まれたとき、誕生の記念にと、私の家にあつた日本刀一振と一茶の俳画を一幅持つて行ったのである。私は七人兄弟の六番目、四男だが、父の死後私がそっくりそのまま全てを相続し、家の残っているので、兄が持つて行くのだった。刀であろうが一茶の俳画であろうが、それはかまわないのだ。ところが『夜明けの・』の中にその事を書いたものだから、それを読んだ兄が慌てて返しに来たという訳だ。しかし私は、これくらい物は別に家宝というほどの物でもなく、兄だったから大威張りして持つて居てよいのだと思つてゐる。「返す」「返さなくてよい」で押し問答をしたが、「やつぱりこれは家に置いた方がよい」という兄の意

見通り、家に戻してもらう事で落着いた。「それにしてもどうして本の中では、兄が持つて行った、としないで、弟が・」と書いたの？」と家内が言つた。「それには訳があるんだよ、古い話にひつかけてみただけさ」と、私は答えておいた。

明治の頃が大正だろうか、私の祖父の弟が分家独立していた時、家に代々伝えられていた家宝の日本刀一振を分家に持つて行つていたのである。祖父は父の死の床で弟に「あの刀だけは持つてきておけよ」と何度も念を押していたと言う。しかし祖父の死後その刀は戻つてこなかった。そんな事を聞いていた私は、一度その刀を見てみたいと思つてゐた。江戸時代のいつの頃か殿様から拝領したと言われる刀だからである。つまりその刀は、刀としての値打ちよりも、この家にとつて重要な意味を持つ物なのだ。だから祖父は自分が受け継いだその刀を、そのままこの家に残し伝え続けたかったのであらう。一旦外へ出てしまえば、その刀は本来持つていた由来を失い、ただの刀に

なつてしまふ。これは私の家に代々伝えられてこそ、その意味を保ち、そこで初めてささやかな家宝たり得る訳である。どこかの家にもその家の歴史の中のいつの時代か必ず栄光の時代を持つてゐるものだが、私の家のその刀は、過ぎ去つた昔のささやかな栄光の時代を象徴する一つの物的証拠であつたはずである。しかし今となつてみれば、この刀が家に伝えられていないという事は、歸つて良い事なのかとも知れないと思つてゐる。第三者が相対的な冷静な目でみたら大した意味のない過去にとらわれて、自分にとつてだけ絶対的な一振の刀にしがみついて生きていく事は、余りにもみすばらしい事ではないか。むしろ素っ裸になつて遠い未来を見つめながら生きるべきであらう。

ま、それ程大げさな事でもないが、いつか折を見てあの一振の日本刀と一茶の俳画をまた兄に返そうと思う。幸いに私も、今のところ「売り家と唐様で」書かずに済んでいる事だし。（牧羊社「俳句とエッセイ」誌九三年二月号より転載）

「予定日はいつ？」  
「九月一六日。」  
「わあ、じゃあ十三日に生まれますように。私の誕生日だもん。」  
クリーンルームの小さな南向きの窓から、初夏の木漏れ日が差し込んでいた。マキちゃんの検温は、難解のクロスワードパズルの助っ人となったり、休学中の大学の素敵なボーイフレンドの話で盛り上がりたりと、決まって長引いてしまふのだった。結婚直後の私の妊娠に、最初に気づいた患者さんはマキちゃんだった。「もしかして？」とお腹に手を当ててみせた彼女に、私は照れながらもこくりとうなづいて見せたのだった。  
マキちゃんは十八才の春、白生活も、生命への希望と引き替えて諦めなければならなかった。その後、二年間で五回の入院を繰り返した。三度目の入院では、片耳の聴覚と臭覚を失った。

「やっつと、ここまで髪伸びたよ。」  
男の子みたいな短髪で成人式の晴れ着姿を見せにきてくれた二十歳の冬、病状の悪化のため六回目の緊急入院となったのだった。  
「今度は、もう帰れないなア」入院の日、主治医はぼつりとつぶやいた。彼女の白血細胞は、殆ど抗癌剤が効かないタイプのもの、全身状態も日に日に悪化して行くのが目に見えて分かるのだった。  
クリーンルームから、一歩も

の期間でも、彼女は決して自らナースコールを押してくることはなかった。他の用事で入室すると、すまなそうな表情で「ごめんなさい。さっき吐いちゃったの・・・」と訴えることもしばしばであった。  
彼女は、私のだんだんに大きくなってゆく白衣のお腹によく「さわらせて。」と手を当てて

きた。そしてその成長ぶりを自分のことのように喜んでくれるのだった。  
梅雨に入って間もなく、彼女の容態が急激に悪化してきた。白血細胞が全身を蝕み、肺炎や心不全を引き起こしたのだった。胸水で肺は押し潰され、十分に息を吸うことも出来ない。彼女の胸のレントゲン写真を見た医師は、「陸の上で溺れているんだよ。」と言った。  
その夏は猛暑が続いた。その頃私のお腹は、破れ切れんばかりになっていた。「楽しみね。」会う人会う人にそう言われる度、少し誇らし気にお腹をさすって歩いたりしていた。  
八月。その夜も熱帯夜になりそうな夕暮れであった。私はマキちゃんの部屋をノックした。産前休暇前の最後の勤務であった。酸素マスクにすっぽり隠れてしまうほどに痩せてしまった顔で、マキちゃんは精一杯の笑顔を作ってくれた。  
「約束、覚えてる？」  
「うん、九月十三日ね。階段

# 天使になれなくて…(2)

名古屋大学付属病院 江崎 満

採光

## 「大江光の音楽」と「グラン・ブルー」

山形大学医学部教授 仙道 富士郎

学者もどきのつぶやき(2)  
物事に余り感動しなくなつてからどれくらい経つのだろうか。TVドラマを見ていてよく涙ぐむが、これは感動ではなく、老化にともなう脳細胞脱落による情動失禁のたぐいであろう。仕事に追われて・・は、あくまでも言い訳であり、物事を真正面から見据える習慣を失つてしまつたことに全てを起因すると思われる。自然が呈示する輝きを垣間見る喜びに触れることが、本来の研究であり、それは感動に繋がっていくはずなのだが、この発表によって科学研究費はもらえるのだろうかといった発想のもとに営まれる研究活動からは、喜びも感動も生まれてこない。こんな心理状況で鬱屈していたとき、最近とても感動する経験を持つ幸せに出会った。それも二度も。  
大江健三郎氏の書いたものを比較的よく読み、知的な障害を持つ長男光訓についてしばしば氏が書いていることは知つてい

た。彼は光君との出会いに触発されて、より深く思索を進めていったと思われる。光に向かつて歩んでくれるように願いを込めて命名したであろう、その光君が「大江光の音楽」を③におさめて発表した。私は父、大江健三郎氏への興味から、その③を東京駅の本屋で買い求めた。光君の曲を聞きながら、涙が流れて仕方がなかった。言葉で彼の音楽を汚したくないのだが、とにかく澄んでいるのである。不協和音を多用し、聞き手を不安に陥れる現代音楽と対極に位置するような、伸びやかな音のつながりが感じられるのだ。父、大江健三郎氏は③への添え書きのなかで、「・・・はくは信仰を持たない人間ですが、恩寵というものを音楽に見いだすと言わずにはいられません。・・・僕は光の音楽と、その背後にある、現世の自分たちを超えたものに耳を澄ませるのです。・・・」と述べている。氏が繰り返すその

著書のなかで触れている救いへの道に通じるものである。多言は要しまい。ぜひ一度聴いて欲しいと思う。  
二度目の感動も全く偶然に訪れた。冬の日曜日、時たま私と妻は突発的に映画館に足を運ぶ。その日も、朝十時頃思い立ち、内容に関する予備知識もなく「グラン・ブルー」というタイトルの二時間四十五分の長編を見に出かけた。ストーリーは二人のダイバーのごく単純なものであるが、イルカの心を理解しているかと思われるくらい、海にとけ込んでいく主役の青年の青く透き通るような瞳に、私たちは釘付けにされてしまった。私はときどき、鏡の中の自分の目を見つめることがある。よこしまなことを考えている日は、鏡の中のいやらしい目がこちらを見つめている。一瞬ではあるが、私は反省する。やはり眼は心の窓なのである。この映画の監督は、澄みきつた眼の青年を求めて、パリ、ニューヨーク、ロス、ローマ、ロンドンとオーデションを繰り返した末に一人の青年を見つけたのだと言う。



虹の国から

## ありがとう

山形 睦男

僕は、今年、高校の入学試験に合格することが出来ました。これはみなさんのお助けがなければ果たすことの出来ないことでした。今思えば、僕は、小学五年生の初夏にこの家にやってきました。ここに来るまでは、ろくに勉強などしていませんでした。

この家に来てから、家の大人の人やヴォランティアの方々が一生涯懸命学習指導をして下さいました。僕はこの人たちにとても感謝しています。

また、ここで出会った仲間たちも、懸命に生きていて、特に去年先輩たちが高校に入学して下さったことも励みになりました。

私たちが高校に行けるようにと応援して下さいたくさんの人たちにも、心から感謝します。高校では精一杯がんばります。

小林 晃子

私は、今年無事に高校入学試験に合格できました。それはみなさまのお励ましやお祈りのおかげです。

私は、自分の学力では難しいと学校の先生にも言われている高校をめざしました。

得意ではない受験勉強の毎日に、くじけそうになったりしました。学校の先生が「お前なら大丈夫、自信を持って頑張れ」と言われたり、教会学校の先生や私の会ったこともない人までが「受験で大変でしょう。頑張つてね。」「もうすぐね、応援しているからね、頑張つて。」と私のことを心にかけて下さいました。そんな時に、私は沢山の人たちに見守られているのだ、それに応えるためにも頑張ろうと思いました。そうでなかったら合格できなかったと思います。本当にありがとうございます。全力で入学した高校で思いっきりがんばります。これからもよろしくお願いいたします。

## 子どもたちの季節

仙道家

兄妹に真実告知をしたのは一昨年の一月。両親は離婚し父に新しい奥さんと子どもがいることを兄妹にも理解できるように、そして出来るだけ傷つけない言葉を選んで菅原が伝えた。これまでどの様子の違いから何かあるだろう・と、うすうす感じていた二人であったが、話を聞いた後は、想像通りかなりの動揺を見た。特に妹の千沙は大泣きし、その晩は私の布団と一緒に眠った。

それから約2年後、二人は初めて父の奥さんと異母妹と対面した。初めはかなり緊張した二人であったが、運動会という解放的な場面や、小さくて可愛い異母妹が媒介となり、間もなく慣れ親んだ。その後、月一回父は家族と来訪し二人との関係が始まった。

今年の二月、この月生まれの子、奥さん、妹のために二人は自分の小遣いで誕生日のプレゼントを用意した。

こうして現在、父の新しい家族と兄妹の関係は良好である。しかし、異母妹は父と一緒に暮らせるのに、どうして自分たちは・・という不条理を感じているに違いない。今のことを考えれば、引き取つてもよいといっている父や奥さんの思いに従えばいいのだが、目先のご馳走に飛びつくことが最もよい方法だとは思えない。

さまざまな事情で今は連絡のない実母だが、母親への思いもついに二年前まで行き来があったのだから充分あるだろう。そんなことへの複雑な想いを持ったまま思春期を迎えることも考慮して、おそらく二人が自立し自分で判断できるまでこの関係は続くのだろう。

二人はこの一年、大きく成長した。何か心の中のモヤモヤが吹っ切れて、彼らが本来持つ実力が表現されたのだろう。そんな二人を見てみると、真実を告げたことや新しい家族との対面は無駄ではないばかりか、大きな飛躍の源動力になったようである。子どもが持つ無限とも思えるエネルギーをこそ信じ、妨げにならないよう心して新しい年度への身構えをただしている。

倉沢 智子

## 原田家日記

子どもたちにとって聖らかな想いとファンタスティックな夢と美しい期待の楽しいクリスマスは一年中で最も大きな出来事です。

その後に、家族や家庭が鮮やかに彩るお正月がやってきます。

帰省できる子どもは引き続いての楽しみですが、そのかなわない子どもにとっては、何ともやり切れない季節を迎えることとなります。家族への働きかけは懸命にしているのですが、年を重ねるごとに、帰省できる子どもとできない者とは次第に固定されてきます。多くの方々のお力添えによって、出来るだけ寂しいお正月にならないように励むことが出来ることは感謝です。

大好きな父からの連絡が久しく途絶え、祖母の家にも祖母の病気で、帰省ができなくなった山口兄妹は、担当の私と一緒に過ごすことになりました。他の子どもたちが家族に手を引かれて出かける姿を見ながら、父がきてくれるかも知れないと、ギリギリまで期待を捨てない兄妹です。弟の啓二に、「どうしてババ来ないの」と、何度も聞いただされました。そんな兄弟の「由香さんちについてみたい」というリクエストで、私の実家に泊まりに行きました。

大人ばかりの家で、たくさん可愛がられ、お年玉ももらって上機嫌でした。私の弟とドライブに出かけ「お兄ちゃんの手を、すつくカッコーいんだよ。」と興奮し、トランプに興じ、父の「インチキ手品」に「すつごい」と大喜び。風呂も寝るのも父と一緒に、ベタベタ甘えての一泊二日。「まだ帰りたいくない。」としつこく兄が祖母に、「とても楽しかった」と報告の手紙を書きました。私の家で、私の家族に囲まれながら、ただ一緒にいるだけだった私の関わりに「たのしかった。」と笑顔で言ってくれる子どもたちにも、誰よりも感謝しています。家族・それを意識しなければならぬ時に、寂しさだけが残ることのないように・・なにもできないで、祈る思いでこの季節をやり過ごしました。竹下 由香

## まなざし

佐藤家

清楚に香る梅やあでやかな桃に心が浮き立つ季節になりました。今年は、私にとっても、光の子どもたちの家のものたちにとっても不安と期待を含んだ変化の際だつ年となりそうです。

ある土曜日の昼、担当の子どもたちに、私がこの春、後任が決まり次第退職し、故郷に帰り、もう少ししてみたいことを少しつづやってみようと思っていることを告げました。担当のグループはそれぞれ他の人に担当されること、職員たちはその事で、出来るだけマイナスの残らないよう懸命に考えていること、私はこれからみんなの応援と、出来る関わりをしていくなども話しました。

子どもたちは、誰も一言も話さず、下を向いたり、まっすぐ前を見つめていたり・・緊張して静かに事実を受けとめていたようです。

ここでの八年余りの私の働きは失敗の連続でした。もう少し子どもたちの成長を待てたら、柔らかに優しい関わりがもつとあつたら・・。ここで暮らす辛さも悲しさも少なくて済んだだろう・・。

それでも前を向いて必死で歩んでいる子どもたちの姿に、懸命に励む仲間たちにどれほど沢山のことを学び、考えを豊かにされたことでしょうか。それはどんなに多くの貨幣でも、また、他で得ることとは出来ない「真心」の様なものだったと思います。

ここを去ることについて、辛くて寂しいことだと考えてきました。しかし、今は・・子どもたちに事実や本当の思いなどを告げたときから、私や子どもたちや仲間たちにとって、大きく変化し、その変化は大きな飛躍をもたらすだろうと心から思えるようになりました。別れるのではなく、光の子どもたちの全てに自然なつき合いが始まるのだと思います。子どもたちをとりまく、光の子どもたちの家をとりまく沢山の応援者の一人として、子どもたちの悲しさや優しさなどをよく知り、引き続いて責任を果たすべき大人の一人として・・暖かいお支え、お交わり、ありがとうございます。秋元 光代

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

光の子どもの家の開設に向けてその前年の秋に、あちこちの大学や短大で教鞭をとる友人や知り合いに依頼して、それぞれ

現場から

いつでもいっしょ！ V

五来 淑子

それぞれの家の前庭にも春の香りが濃くなってきました。日毎に膨らんでいく新芽は、心をなごませてくれます。

そんな草花や木々に負けない子どもたちの成長も毎日一緒に居るものさても分かるほどです。

先日8才の誕生日を迎えた悠子のお祝いの会を開きました。

もう何ヵ月も前から、招待するお友だちを考え、ほしいプレゼントのことで心がいつぱいの悠子でした。一年に一度しかやって来ない誕生日は、どの子どもも、夢にみるほどの素敵な時間になるよう心をいつそう込めて準備します。

誕生日には、両親が駆けつけて下さいました。沢山のお友だちに囲まれ、一人一人からお祝いのご挨拶を頂きました。仙道家の長男である匠からは「2年生なのに洗濯物干しのお手伝いや、妹の面倒をよくみてあげられて、すごいと思う。」と誉めてもらい、同年の千沙からは、

誕生日には、両親が駆けつけて下さいました。沢山のお友だちに囲まれ、一人一人からお祝いのご挨拶を頂きました。仙道家の長男である匠からは「2年生なのに洗濯物干しのお手伝いや、妹の面倒をよくみてあげられて、すごいと思う。」と誉めてもらい、同年の千沙からは、

「スイミング、一緒に頑張ろうね。」と励まされました。誕生日には、ご馳走や、ケーキを食べるだけの時間にしたいくはありません。どんな子どもとも生まれることが出来、出会うことのできた喜びを共に持ちたいのです。さまざまな理由によって、両親と離れ、抱えきれないほどの矛盾や疑問を持ち、それでも生きようと、成長しようとする誰よりも頑張っている子どもたちです。そんな子どもたちだからこそ、生まれてきてくれてありがとう！という気持ちを伝えたいと願っています。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

情緒がいつぱい育つように、二人でお花を育てることを始めて二年が過ぎるでしょうか。

初めは、部屋に置いた花や観葉植物などには関心を示さず、

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

花の種を蒔いても。その後の世話に自分から手をかけることはありませんでした。お水を忘れ土がカラカラに乾いたこともあり、花瓶の水を代え忘れ、枯れてしまった花もありました。それでも、植物のある部屋を心がけ、花が絶えないように、二人で育てていくことを続けました。

今年の誕生日のプレゼントにほしいものの中に、初めて「お花」という言葉がありました。「長く、いつぱい咲くお花がほしい。」と、悠子は言いました。

今、悠子は毎朝、大きくなってきたチューリップの芽に水をやり、庭に植えたバセリを見に行き、部屋の植物達の世話もしてくれています。どの様に手をつけたらお花が長く咲き続けるか・枯らさないようにするには・と、自分で考えられるようになり、お花たちを心に覚えていられる悠子です。そんな、優しくなれる気持ちが育ってきたことを本当に嬉しく思います。

誕生日のプレゼントに、鉢植えのお花を頂き、また一つ増えたお花の世話が始まりました。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

悠子の生活に「お花」があることで、悠子の心は沢山のことを思い考えられるようになり、多くのことをどんどん吸収し、悠子自身の花を咲かせる準備をしているのでしょうか。

私にとって、花は悠子であるように思います。間違えて摘み取ってしまった芽もあるに違いない心にしてしまうことだつてあるのです。そんなことを何一つ決してとがめだてしない悠子や子どもたちでもあるのです。

そんな子どもたちの優しさや涵養さを、いつどんな時でも、私の心の中に覚えておくこと・それが何よりも子どもと共に成長する力になるのでしょうか。

沢山の生きものたちが目覚める春です。めざましい成長をしていく彼女の力に追いついて行けるように、私の心を大きく豊かにしていきたいと願います。

誕生日のお祝いの言葉に、プレゼントに「ありがとう」という悠子を見ながら、沢山のフアイトと力が与られ、そんな悠子に、心からありがとうを伝えたいと思いました。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

悠子は、幼い頃の不安定な生活環境からなかなか豊かな情緒が育たず、人間関係をじょうずに結べないのは、それが原因のように言われてきました。

## 日誌抄

九二年十二月一日  
九三年一月末日まで

十二月一日 ゼンブランデー

ヨンよりみずみずしい春菊を。

二日 町駅伝大会で原道小優勝。

安田君大活躍。

○県内在住の子どもの家族を訪

問しやつてくるお正月に帰省

できるよう調整開始。

十三日 第三アドヴェント。礼

拝と楽しい夕食会と手作りの

クッキー三個とを頂いてクリ

スマスへ備える。

十四日 故江森誠次氏の奥様と

ご長男ご夫妻が調髪のご奉仕。

二〇日 東大宮教会・教会学校

合同のクリスマス礼拝。この

礼拝で高一の大森哲也君が光

の子どもの家の初めての受洗。

この家の初穂と感謝を捧げる。

二一日 東海林悦子とその仲間

たちが例年のようにハーブが

主体のクリスマスコンサート。

ファンタジックに素敵なた。

○この頃から町内外の沢山の方

々のプレゼントやお励ましを

相次いで・・。お名前を記し

て御礼申し上げるべきところ

ですが、職員たちからの心ず

くしの感謝の便りに代えさせ

て頂きます。クリスマス、お

正月と続く子どもたちの楽し

みがかなえられます。感謝。

○クリスマスが終わるまでとは

頑張ってきた竹花信恵が、急

性腹膜炎と憩室炎を併発し緊

急入院手術。一命を。

二四日 クリスマス・イヴ。夕

食後キヤンドルサーヴィス。

竹下由布子先生の倒れた竹花

の代わりのご指導を得た職員

たちの独唱や合唱の讃美と聖

書朗読と大人から子どもたち

へのメッセージと子どもたち

の応答の祈りのゆきかう感動

の讃美礼拝。夜半には担当者

が心を込めた手作りのプレゼ

ントをサンタクロースが、う

つつとまどろみの半ばする

笑顔が素敵な子どもたちへ。

二五日 クリスマス。家族とお

友だち、教会学校や学校の先

生方、日頃お世話になってい

る人々などをお招きしての、

ページェントによるクリスマス

ス礼拝とお祝いの会を楽しく

二八日 もちつき。夏休みにお

世話になった谷本画伯が、素

晴らしい作品のプレゼントを

二九日 東地区婦人会・愛育班

が来訪してお励ましを。感謝。

○迎えの家族と家庭帰省始まる。

○大掃除。

三一日 年越し。おそばを食べ

て。剣道は越年稽古。

一九九三年元日。午前九時四五

分より全職員と残っている子

どもたち、子どもの家族など

と元旦礼拝。お雑煮を頂いて

新年の挨拶と抱負を語り合う。

四日 お正月気分をぶつ飛ばそ

う会。荒巻氏もケンちゃん

と一緒に元気にガンバルゾ！。

アキちゃんはどうした？。

八日 三学期始まる。やつてく

る新しい年度へ向けての助走

が始まる。

二四日 騎西町主催の近郊駅伝

大会へ原道小学校チームが参

加。安田、田口、佐藤が出場

して優勝。やったね！。

二九日 新しい年度を迎えるた

めの全職員の今年度の総括と、

もう少しよりよい取り組みを

願ってする忠告をする会。電

話や訪問者のない夜八時から

大きい子どもたちに留守番を

頼んで。遅くまで真剣にそし

て厳しく！

(くら)

## 反射光

今年も高校を受  
験した二人が合  
格しました。そ

の子どもたちが、この結果は自分  
だけで得られなかった。誰  
かに感謝したい。と、紙面を与  
えるように言ってきました。六  
面虹の国から欄に載せました。  
どの原稿も依頼して書いて頂い  
ていますが、これは彼らの心か  
らのもので、本誌発行以来の事  
件です☆久喜市の原麻美、戸田  
市の古賀詠子、川越市の堀尾隆  
の各氏に町内の中島伸介、中島  
央尊両氏など、学習ヴォランテ  
ィアの方々が定期的に、試験の  
前などは何回か熱心にご指導下  
さり、手薄な職員を助けて下さ  
ったこともこの成果の力である。  
その、中島伸介氏が新年度から  
学校の先生になられる。教育現  
場の数少ない良心的で熱情あふ  
れる教師として活躍されること  
であろう☆新しい年度は中学生  
以上が1/3になる。上の子の  
社会への巣立ちの準備もしつか  
りしなければ・・。新しい年度  
も課題がぎっしりである。たゆ  
む間もなく励みます。(哲)